

<総説>

親による乳幼児への体罰に関する文献検討

三国 久美*、木浪 智佳子*、加藤 依子*、川崎 ゆかり*

抄 録：

目的：国内の先行文献をもとに親による乳幼児への体罰に関する知見を明らかにし、親による乳幼児への体罰を防止するために必要な研究課題を検討すること。

方法：医中誌WEB ver.5を用い、1990年から2019年までに出版された原著論文の中から親による乳幼児への体罰に関する10文献を選定した。さらに該当する4文献を加え、計14件を対象文献として、これらの論文を概観した。

結果：対象とした14文献のうち、2000年以降に出版されたのは12件、量的研究が11件、母親を対象者としたものが12件であった。体罰の定義を記述した文献は1件のみであり、多様な調査方法が採用されていた。親による乳幼児への体罰に関する知見は、体罰の実態と子どもへの体罰に対する認識に2分類された。子どもに体罰を行う割合を調べた研究の中で、対象とした母親の96.6%が体罰を与えていたという報告があり、他の研究と比べて最も多い割合だった。体罰に対する親の認識として、叩き方が軽微であり、しつけという理由により子どもの手や尻を叩く場合は、その行為を許容範囲であると考える親が多かった。また、複数の子どもを育てている母親は、より体罰を肯定的にとらえていた。

考察：親による乳幼児への体罰を防止する方策を検討するために、体罰が起きる状況を明らかにする質的研究や父親を対象者とした研究が必要である。また、親による乳幼児への体罰を防止するための介入研究の蓄積が望まれた。

キーワード：乳幼児・親・体罰

I. 緒言

近年、しつけと称した体罰を親から受けた子どもが死に至るという悲惨な事件が相次いだ。このような過度の体罰に対する批判の高まりを受け、2020年4月には、親による子どもへの体罰の禁止が児童福祉法および児童虐待防止法に法定化された。

体罰の定義はさまざまであるが、国連では、「有形力が用いられかつ何らかの苦痛を与えることを意図した罰」（国連子どもの権利委員会, 2006）と定義しており、しつけを意図した行為であるかどうかにかかわらず、結果として子どもに身体的な苦痛を与えることから、身体的虐待に含まれるものとして位置づけている。また、国

外で行われた75論文を用いたメタ分析では、体罰を受けた子どものみならず、その子どもが成人になってからも心理社会的発達に及ぼす様々な悪影響が明らかになっている（Gershoff & Grogan-Kaylor, 2016）。このように体罰には有害なリスクが複数ある一方、メリットを証明した研究はない（子ども健やかサポートネット, 2016）。

しつけは乳幼児期から行われることから、より早期から親による子どもへの体罰を減らすための取り組みが望まれている。また、日本では、スポーツの場でよくみられる“気合を入れる”もしくは指導者の「愛情表現」の表れ（西山, 2014）として体罰を容認する文化があることが指摘されており、欧米とは異なる文化的背景を踏まえた取り組みを検討する必要がある。そこで、本研究では、国内で行われた親による乳幼児への体罰に関する様々な先行研究の知見を概観することにより、体罰の防止に貢献する研究課題を検討するための示唆を得ること

*看護学科母子看護学講座

ができると考えた。

II.研究目的

本研究の目的は、国内の先行文献をもとに親による乳幼児への体罰に関する知見を明らかにし、親による乳幼児への体罰を防止するために必要な研究課題を検討することである。

III.用語の定義

本研究では親による乳幼児への体罰を、「しつけのためだと親が思っても身体に何らかの苦痛を引き起こし、又は不快感を意図的にもたらす行為」(厚生労働省, 2020)と定義した。

IV.研究方法

1. 文献の選定方法

文献の選定には医中誌WEB ver.5を用いた。1990年から2019年12月までに出版された原著論文であり、検索式を「(体罰) or 「身体的虐待」 or 「しつけ」 and 「乳幼児」として検索を実施した。なお、本研究で定義した体罰に該当する研究を抽出するため、検索式に「体罰」のみならず「身体的虐待」と「しつけ」を含めて、広範囲から文献を選定した。その結果、53件の文献が検索された。これらの文献の中から、親による乳幼児への体罰を扱っていない文献を除き、10文献を選定した。さらに、「体罰」and「原著」で検索された54件の文献の中から、親による乳幼児への体罰に関する知見を述べていた3文献と、ハンドサーチにより抽出した1文献を加えた計14文献を本研究の対象文献とした。

2. 分析方法

対象文献の出版年、研究方法、対象者、体罰に関する知見を得るための調査方法についてまとめた。さらに、これらの文献で言及している体罰に関する知見を抽出し、その内容をもとに分類・整理した。

V.結果

1. 出版年

対象とした14文献の出版年を表1に示した。出版年は、1997年から2019年までであり、児童虐待防止法が制定された2000年以前の文献は、2件と少なく、2001年以降は、12件であった。

2. 研究方法

研究方法について、分析方法を基に分類したところ、

量的研究が11件、質的研究が3件であった(表1)。

3. 対象者

母親を対象者とした研究が14文献中12文献と多く、質的研究の対象者は全て母親であった。また、父母(佐藤他, 1999)、保護者(望月他, 2010)を対象者とした文献があった(表1)。

4. 体罰に関する知見を得るための調査方法

対象文献における体罰に関する知見を得るための調査方法を表2にまとめた。

14文献のうち、体罰の定義を記載していたのは1文献のみであり、体罰を「こらしめのために、からだに直接苦痛を与える罰」(細井他, 2013)と定義していた。量的研究では、体罰という言葉を用いずに「危険なことをしたり注意を聞かなかったときは、げんこつをしたり手の甲をたたいたりして厳しくしている」(佐藤他, 1999)などの親の意図や行為を具体的に表現した例文を提示したり、「子どもを叱るとき、叩く、つねるとか、けるなどの体罰をういますか」(原田他, 2004)など体罰という言葉そのものを用いて質問項目にしていた。また、虐待傾向尺度(酒井他, 2007)など、下位因子の1つとして体罰に該当する設問が含まれていた文献もあった。

質的研究は全て、体罰の定義はなく、結果として示された語りの内容(門間他, 2017)、カテゴリー(細坂・茅島, 2017)やサブカテゴリー(片山他, 2019)が、本研究で定義した体罰に該当していた。

5. 親による乳幼児への体罰に関する知見

親による乳幼児への体罰に関する知見を概観したところ、親による乳幼児への体罰の実態(以下、体罰の実態)と子どもへの体罰に対する親の認識(以下、体罰の認識)に2分類された(表1)。

1) 親による乳幼児への体罰の実態

体罰の実態を明らかにした研究は9文献であった(表3)。これらの文献の対象者は全て乳幼児の親であるものの、対象者の選定条件、対象者数、質問の内容は様々であった。子どもに体罰を行う割合を調べた研究の中で、対象とした母親の96.6%が体罰を与えていたという報告(金谷・杉浦, 2006)があり、他の研究と比べて最も多い割合だった。

2) 子どもへの体罰に対する親の認識

体罰の認識を調べた研究において、70.4%の母親が必要なものとして体罰を肯定していた(川島他, 2001)。また、しつけという理由があれば、「虐待ではない」(前田・秋津, 2018)、「軽微な体罰はやむを得ない」(細井他, 2013)ととらえる親が多かった。

叩く部位や程度を調べた研究では、母親は「手」や「尻」を軽くたたくのであれば、しつけの範疇である(金谷・杉浦, 2006; 細井他, 2013)と考えていた。

表 1 対象文献の概要

文献No.	著者 (出版年)	研究方法 (調査時期)	分析対象者	調査内容 実態 認識	親による乳幼児への体罰に関する主な知見
1	西見他 (1997)	量的研究 (1995年10月)	小児科外来を受診した 母親 300人	○	「子どもに暴力をふるった経験あり」と回答したのは45.7%だった。その内容をもとに3群に分類したところ、しつけ群43.1%、境界群40.9%、虐待予備群16.0%であった。
2	佐藤他 (1999)	量的研究 (記載なし)	保育園・幼稚園に通園する小児の父母 735組	○	身体的虐待はしつけという理由があるときには虐待と認識されにくかった。子どもの虐待の認識には父と母、父母の年代、子ども数、相談相手の有無で差がみられた。
3	川島他 (2001)	量的研究 (1999年8～12月)	1～3ヵ月児を持ち乳児健診に来院した 母親 345人	○	母親の70.4%が体罰を肯定していた。体罰を肯定する割合は初産婦（61.8%）と経産婦（81.2%）で有意差があった。
4	原田他 (2004)	量的研究 (2003年)	4ヵ月～3歳児健診を利用した保護者 3900人（ 99%以上が母親 ）	○	子どもを叱るときに体罰を「いつも・時々」用いるのは65%で、これは1980年生まれの子どもの対象とした「大阪レポート」の結果とほぼ変わらなかった。
5	金谷他 (2006)	量的研究 (2002年1～3月)	子育て講座に参加した 母親 60人	○ ○	子どもが1歳に満たない2名を除くと、96.6%の母親が体罰を与えていた。叩く部位は「背中・尻」、叩き方は「手の平で軽く」であれば、しつけの許容範囲と考えていた。
6	酒井他 (2007)	量的研究 (2005～2006年)	1歳6か月健診を受けた 母親 946人	○ ○	体罰叱責傾向の高さと認知の問題、関係不安の強さの間に正の相関がみられた。
7	伊藤 (2007)	量的研究 (2006年)	乳幼児を養育中の 母親 702人	○	子どもが言うことをきかないとき体罰を「時々与える」と回答した母親は53.0%で、「与えないことにしている」と回答したのは43.9%であった。
8	望月他 (2010)	量的研究 (2005・2006年)	全国の認可夜間と併設昼間保育園に在籍する子どもの保護者2,050人のうち虐待確定・疑いと評価された6事例	○	6事例の回答を2005年と2006年で比較したところ、子どもが失敗したときに「叩く」と回答したのは2名から1名に、「先週子どもを何回叩いたか」で「1～2回以上」の回答は4名から3名に減った。
9	細井他 (2013)	量的研究 (2006年11月)	幼稚園の3歳児クラスに在籍する児童の 母親 1029人	○	しつけのためなら軽微な体罰はやむを得ないと考える母親が56.9%だった。「手でお尻をたたく」は83.9%の母親がしつけの範囲と考えていた。
10	細川他 (2016)	量的研究 (2013年6～8月)	保育所・幼稚園の4・5歳児の 母親 1341名とその子ども	○	養育者の体罰を伴う関わりは子どもの発達のうち、自己制御に負の影響を及ぼしていた。
11	門間他 (2017)	質的研究 (2015年)	「子育てしゃべり場」に参加した 母親 57（延べ82）人	○	母親は「理由があって叩くならしつけ」で「理由なく手を挙げるのは虐待」と考えていた。また、限度を超えて手を挙げるのは虐待と考えていた。
12	細坂他 (2017)	質的研究 (2014～2015年)	乳幼児を養育する 母親 26人	○	抽出されたカテゴリーのうち、【母親が感情的になると無意識に押し付けてしまう子どもへのパワー】と【子どもの属性で異なるしつけ】で、体罰をする状況が語られた。
13	前田他 (2018)	量的研究 (2015年6～12月)	母子保健事業を利用した乳幼児の 母親 1006人	○	「約束を破ったのであたまではなくおしりを叩いて叱った」という例文に「虐待である」と回答した母親は少なく、しつけという理由があれば「虐待ではない」と考えていた。
14	片山他 (2019)	質的研究 (記載なし)	EPDS9点以上の抑うつ状態にある母親6名と育児不安が強い 母親 6名（子どもの年齢は0から4歳）	○	母親は日々、「子どもへの対応が分からずイライラ、悶々として過ごす」という状況にあり、思い通りにならない、子どもが悪いと思うなどの場合に「自分は悪くないと自己防衛する」。その結果として《思わず手が出る》という帰結に至っていた。

注：出版年順に示した

表 2 体罰に関する知見を得るための調査方法

文献No.	著者 (出版年)	体罰に関する知見を得るための調査方法
1	西見他 (1997)	「子どもに暴力を振るったことがあるか」の有無を尋ね、ありの場合にその内容を自由記載で回答
2	佐藤他 (1999)	「危険なことをしたり注意を聞かなかったときは、げんこつをしたり手の甲をたたいたりして厳しくしている」「3歳6か月の子どものほとんど毎日おもらしをするので、母親はその度で手でお尻を10回ほどたたく」など、体罰に該当する4つの例文を含めた13の例文を提示し、虐待に該当するか5段階で評価と
3	川島他 (2001)	育児に関連した虐待リスク11因子の1因子として「体罰の肯定：子どものしつけにはたたいたりすることは必要でない」と尋ね、同意の程度を4段階で評価
4	原田他 (2004)	「子どもを叱るとき、叩く、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」と尋ね、「いつも」「ときどき」の頻度で回答
5	金谷他 (2006)	しつけとして叩く身体部位（手、尻など）、叩き方（軽く、きつく）、体罰を行う子どもの態度（口答えをした時など）や場面（食事の場面など）を選択して回答
6	酒井他 (2007)	虐待傾向尺度の1因子の設問として「子どもが言うことを聞かないときは体罰を与えて当然だと思う」「子どもをたたく」を尋ね、4件法で回答
7	伊藤 (2007)	「子どもが言うことをきかない時、体罰を与えるか」と問い、「与えない」「時々与える」など頻度を選択して回答
8	望月他 (2010)	「子どもが失敗したときの対応としてたたくかどうか」、「先週子どもを何回たたいたか」を回答
9	細井他 (2013)	「しつけのためなら軽微な体罰はやむをえないと思うかどうか」と尋ね、「やむを得ない」から「好ましくない」まで4段階で回答
10	細川他 (2016)	既存の尺度を合成し作成した「育児方法」の1因子「体罰を伴うかわり」の設問として、「悪いことをしたとき、叩いて注意する」「言うことを聞かないとき、叩いて聞かせる」と尋ね、「いつもそう」から「全くそうでない」までの4段階で回答
11	門間他 (2017)	しつけや体罰についての考え方、経験をグループセッションで自由に語った内容
12	細坂他 (2017)	しつけと虐待の境界と思われた体験とその理由、どんな状況で境界と感じたのかについて尋ねた半構造化面接
13	前田他 (2018)	「約束を破ったので、あたまではなく、おしりをたたいて叱った」、「兄が弟の頭を叩いたので、痛みを分らせるために本人の頭を叩いて叱った」などの体罰に該当する例文を提示し、虐待であるかどうか回答
14	片山他 (2019)	子どもが生まれてから面接時点までの子育てを振り返り、育児中の出来事と対応方法、その時の気持ちを自由に語る半構成的面接法

表3 親による乳幼児への体罰の実態

文献No.	著者 (出版年)	親による乳幼児への体罰の実態
1	西見他 (1997)	「子どもへ暴力を振るったことがある」と回答した母親137人中、育児の方針のなかで余裕をもって子どもに接した結果である「しつけ群」に分類されたのは59例（ 43.1% ）であった。
4	原田他 (2004)	3900人の母親のうち、子どもを叱るときに体罰を「いつも・時々」用いるのは 65% だった。
5	金谷他 (2006)	58人中56人（ 96.6% ）の母親が体罰を与えていた。
6	酒井他 (2007)	体罰叱責傾向の高さと認知の問題、関係不安の強さの間に正の相関がみられた。
7	伊藤 (2007)	子どもが言うことをきかないとき体罰を「時々与える」と回答した母親は 53.0% で、「与えないことにしている」と回答したのは43.9%であった。
8	望月他 (2010)	6事例の回答を2005年と2006年で比較したところ、子どもが失敗したときに「叩く」と回答した保護者は2名から1名に、「先週子どもを何回叩いたか」で「1～2回以上」の回答した保護者は4名から3名に減った。
10	細川他 (2016)	養育者の体罰を伴う関わりは子どもの発達のうち、自己制御に負の影響を及ぼしていた。
12	細坂他 (2017)	抽出されたカテゴリーのうち、【母親が感情的になると無意識に押し付けてしまう子どもへのパワー】と【子どもの属性で異なるしつけ】で、体罰をする状況が語られた。
14	片山他 (2019)	母親は日々、「子どもへの対応が分からずイライラ、悶々として過ごす」という状況にあり、思い通りにならない、子どもが悪いと思うなどの場合に「自分は悪くないと自己防衛する」。その結果として「思わず手が出る」という帰結に至っていた。

注：文献No.は表1と同じ番号を示した

表4 親による乳幼児への体罰の実態および子どもへの体罰に対する親の認識に関連する要因

文献No.	著者 (出版年)	調査内容 実態 認識	関連する要因の知見
1	西見他 (1997)	○	体罰の経験の有無と年齢・職業・同居家族・学歴との関連はみられなかった
2	佐藤他 (1999)	○	父よりも母、年代がより若い父母、 子ども数が1人 の母、相談相手がいる母が体罰を虐待と認識していた
3	川島他 (2001)	○	経産の母親は初産の母親よりも体罰を肯定していた
5	金谷他 (2006)	○ ○	母親の養育態度尺度において、統制群・責任回避群の母親ほど体罰を行う傾向が強かった（統計学的検定の記載なし）
6	酒井他 (2007)	○ ○	虐待傾向尺度の第2因子「体罰叱責傾向」は育児サポートの有無では関連がみられず、 子どもの出生順位 と関係不安で有意な正の相関がみられた
7	伊藤 (2007)	○	母の学歴が高いほうが体罰を行っていなかった（統計学的検定は未実施）
9	細井他 (2013)	○	母親の母性意識尺度と関連があり、母親であることに否定的な母親のほうが軽微な体罰を容認していた
10	細川他 (2016)	○	「体罰を伴うかわり」の多い家庭の児ほど、自己制御の得点が有意に低かった
13	前田他 (2018)	○	母親の年代では差がなく、 第一子 、子どもが低年齢である母親のほうが体罰を虐待と認識していた

注：文献No.は表1と同じ番号を示した

3) 親による乳幼児への体罰の実態および子どもへの体罰に対する親の認識に関連する要因

対象文献で明らかにされていた体罰に関連する要因を表4に示した。体罰の実態に関連する要因を調べた文献は3件、体罰の認識に関連する要因を調べた文献は4件、両方の関連要因を調べた文献は2件であった。

年代や学歴、子ども数など親の基本属性との関連をみた研究が多く、母親の母性意識（細井他, 2013）や養育態度（金谷・杉浦, 2006）、子どもの発達（細川他, 2016）との関連をみたものがあった。

どの研究でも一貫して同じ結果が得られた関連要因は、母親の出産回数もしくは子ども数であり、初産（川

島他, 2001) もしくは子ども数が1人の母親(佐藤他, 1999: 酒井他, 2007: 前田他, 2018) は、経産もしくは子ども数が2人以上の母親よりも、体罰に否定的な認識を持っていた。

VI. 考察

本研究で対象とした文献の大多数が2001年以降の出版年であった。2000年に児童虐待防止法が制定され、児童虐待という社会的問題への関心が高まっている半面、体罰を含む児童虐待の相談件数が増加し続けていること、2020年4月に改正された児童福祉法等で体罰の禁止が明記されたことから、体罰防止の機運が高まっており、今後、親による子どもへの体罰に関する研究の増加が予測される。

研究方法をみたところ、量的研究が大多数であった。量的研究では、集団としての実態や認識を把握できる半面、体罰をめぐる親の心情や親による体罰が起きる状況を把握することは難しい。今後は質的研究を蓄積してどのような状況で体罰が起きているのか検討することにより、支援の方策を考えるための示唆が得られるのではないかと考える。

対象文献のほとんどは母親を分析対象者としていた。児童虐待の相談対応件数(厚生労働省, 2020)をみると、虐待者で最も多いのは実母であるが、実父の割合が年々増加していること、過度の体罰で死亡した子どもの事例の虐待者は実父が多いことから、今後は、父親を対象とした研究の蓄積も必要だと考える。

量的研究の結果を比較することにより、親による子どもへの体罰の実態や認識の推移を確認したいと考えたが、対象者の選定方法や調査方法が一律ではなく、比較は困難であった。法律の制定や介入による体罰の抑制効果を立証したり、メタ分析により日本における親による子どもへの体罰の研究のエビデンスのある知見を得るためには、体罰の定義を明確にし、実態を聞き取る調査方法を統一することが望まれる。

対象文献の知見によると、体罰の実態や認識に関連する要因には、一貫性がみられなかった。その理由として、調査対象者の選定方法の違いが一因であると推測される。また、親による体罰が起きる背景や体罰に対する親の認識には基本属性だけではなく、親自身がどのように育てられたかということや、家族を取り巻く複雑な生活環境が関わっているのかもしれない。唯一、関連要因で一貫してみられた知見は、子ども数が増えるほど親は体罰を容認していたということだった。親による子どもへの体罰を減らすための教育的介入を考えるうえで、複数の子どもを育てている家庭は、体罰が生じるリスクが

高まることを踏まえて、対応を考えることが効果的であることが示唆された。

本研究で選定した文献の中に、体罰を防止するための介入に取り組んだ研究はなかった。海外では、親による体罰を減らすためのヘルスケア専門職を対象とした教育的介入(Hornor et al, 2015)が行われており、日本においても、そのような取り組みの成果を示す研究が望まれる。

なお、本研究は科研費補助金・基盤(C)(一般)20K10946の助成により行った。

文献

- Gershoff ET, Grogan-Kaylor A. : Spanking and child outcomes : Old controversies and new meta-analyses. *Journal of Family Psychology*, 30 (4), 453-469, 2016.
- 原田 正文, 山野 則子, 中川 千恵美, 橋本 真紀, 雲井 弘幸, 加古 真紀, 大野 まどか, 亀岡 智美, 加藤 曜子, 服部 祥子 : 児童虐待を未然に防ぐためには、何をすべきか 子育て実態調査『兵庫レポート』が示す虐待予防の方向性, 子どもの虐待とネグレクト, 6 (1), 14-22, 2004.
- 細井 智子, 後閑 容子, 石原 多佳子 : 母親のしつけの認識に関する研究, 保健師ジャーナル, 69 (5), 378-385, 2013.
- Hornor G., Bretl D., Chaoman E., Chiocca E., Donnell C., Doughty K., Houser S., Morris K., Quinones, SG. : Corporal Punishment : Evaluation of an Intervention by PNPs, *Journal of Pediatric Health Care*, 29 (6), 526-535, 2015.
- 細川 陸也, 桂 敏樹, 志澤 美保 : 就学前児の社会的スキル発達に関連する育児環境の特徴, 小児保健研究, 75 (4), 453-462, 2016.
- 細坂 泰子, 茅島 江子 : 乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相, 日本看護科学会誌, 37, 1-9, 2017.
- 金谷 光子, 杉浦 恵子 : しつけと虐待の狭間 子育て講座に参加した母親へのアンケート調査を通して, 母性衛生, 47 (1), 32-42, 2006.
- 伊藤 わらび : 乳幼児の育児の実態と母親の育児意識(その1) 20年間の変貌にみる育児の諸問題と育児支援のあり方, 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 5, 109-140, 2007.
- 片山 美穂, 北岡 和代, 中本 明世, 川村 みどり, 森岡 広美, 川口 めぐみ : 抑うつ状態にある母親が子どもに感じる思いから辿る育児プロセス, 日本看護科学会誌, 39, 174-182, 2019.

- 川島 美佳, 野田 登美恵, 永松 和恵, 西田 裕美, 飯盛 涼子, 和泉 小百合, 新小田 春美, 平田 伸子, 野口 ゆかり, 加来 恒壽: 乳幼児虐待の予防に向けた助産婦としての援助, 母性衛生, 42 (1), 176-183, 2001.
- 子ども健やかサポートネット: 子どもに対する体罰: その影響と関連性についてのリサーチ要約, 2016年6月, 2020年9月28日 アクセス, <https://www.kodomosukoyaka.net/pdf/2016-GI-summary-J.pdf>.
- 日本弁護士連合会: 国連子どもの権利委員会一般的意見 8号11項 (2006), 2020年9月28日 アクセス, https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/treaty/data/child_gc_ja_08.pdf.
- 厚生労働省: 平成30年度福祉行政報告例の概況, 2020年9月28日 アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/18/dl/gaikyo.pdf>.
- 厚生労働省: 「体罰等によらない子育ての推進に関する検討会」, 2020年2月, 体罰等によらない子育てのために, 2020年9月28日 アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/minnadekosodate.pdf>.
- 前田 清, 秋津 佐智恵: 日常的な虐待行為に対して乳幼児の母親が有する認識の実態, 子どもの虐待とネグレクト, 20 (1), 93-99, 2018.
- 望月 由妃子, 篠原 亮次, 杉澤 悠圭, 童 連, 平野 真紀, 富崎 悦子, 田中 笑子, 渡辺 多恵子, 恩田 陽子, 川島 悠里, 安梅 勅江: 被虐待児の育児環境の特徴と支援に関する研究, 厚生指標, 57 (12), 24-30, 2010.
- 門間 晶子, 山本 真実, 細川 陸也, 富塚 美和: 乳幼児を育てる母親がとらえた「しつけ」と「虐待」 対話的アプローチによる検討, 日本地域看護学会誌, 20 (3), 54-62, 2017.
- 西見 寿博, 市川 光太郎: 外来受診の母親への育児不安調査, 小児科診療, 60 (2), 307-311, 1997.
- 西山 哲郎: 体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える, スポーツ社会学研究, 22 (1), 51-60, 2014.
- 酒井 佐枝子, 加藤 寛: 養育者の対人関係の持ち方が虐待傾向に及ぼす影響 子ども虐待予防に必要な視点を考える, トラウマティック・ストレス, 5 (2), 157-165, 2007.
- 佐藤 奈保, 内田 雅代, 竹内 幸江, 栗林 浩子, 篠原 玲子, 北山 三津子, 俵 麻紀, 河原田 美紀, 御子柴 裕子, 吉沢 豊予子, 北山 秋雄, 南 信 子どもの虐待防止研究会: 長野県K市における乳幼児をもつ両親の「子ども虐待」の認識の実態, 長野県看護大学紀要, 1, 55-63, 1999.

The corporal punishment of infants by parents: A literature review

Kumi MIKUNI*, Chikako KINAMI*, Yoriko KATO*,
Yukari KAWASAKI*

Abstract :

Purpose: To clarify findings on the corporal punishment of infants by parents from existing literature in Japan, and review measures necessary to prevent such physical punishment in the home.

Method: Using Ichushi-Web Ver. 5, an online bibliographic database, 10 publications on the corporal punishment of infants by parents were selected from original articles published between 1990 and 2019 and were reviewed along with four other relevant studies (total 14 publications).

Results: Of the 14 publications, 12 were published after 2000. 11 were quantitative studies, and 12 focused on mothers as the subjects. Only one paper discussed the definition of corporal punishment. Various approaches were used for investigation. The findings were classified into the actual state and the perception of the corporal punishment. Among the studies investigating the percentage of mothers using corporal punishment on their children, one reported the highest 96.5%. With regard to the parents' perception of corporal punishment, many parents consider that moderate hitting of a child's hands or buttocks for discipline is acceptable. Moreover, mothers raising several children were more affirmative about corporal punishment.

Discussion: To consider measures to prevent the corporal punishment of infants by parents, qualitative studies and studies on fathers that help understand the situations in which corporal punishment occurs must be conducted. It is also desirable that intervention studies to prevent corporal punishment be accumulated.

Key Words : infant, parents, corporal punishment

* Department of Nursing, Maternal-Child Nursing